

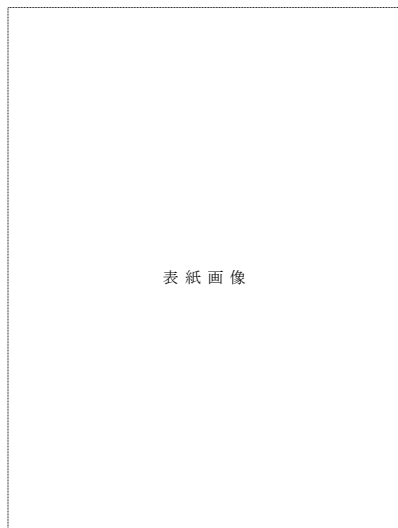
【書評・紹介】

中川 裕 監修／小野 智香子 編

『ニューエクスプレス・スペシャル 日本語の隣人たちⅡ』

(東京, 白水社, 2013年1月, A5判, 165頁+CD付き, 3700円+税)

丹 菊 逸 治



白水社の語学教材「エクスプレス」(現在は「ニューエクスプレス」)シリーズの特別編「ニューエクスプレス・スペシャル」の第三弾である。特別編の第一弾『日本語の隣人たち』(2009年)も第二弾『ヨーロッパのおもしろ言語たち』(2010年)も今どき珍しいほどのいわゆる「マイナー言語」をそろえた野心的な試みだった。こういった本がそこそこ売れているというなら、日本もまだまだ「内向き」などではない。さて、『日本語の隣人たち』のコンセプトは「日本語の近くにあるのに、あまり知られていない言語の入門編」というものだったが、今回もその方針が堅持されている。収録された言語名を並べるだけでニヤニヤ笑いが止まらないという方も多いにちがいない。言語と執筆者を収録順にあげると

- 「樺太アイヌ語」(北原次郎太)
- 「アリュートル語」(永山ゆかり)
- 「オイラトモンゴル語」(バヤリタ／ブリガ)
- 「シベ語」(児倉徳和／久保智之)
- 「ゾンカ語」(西田文信)
- 「リス語」(加藤高志)
- 「ブヌン語」(野島本泰)
- 「小笠原語」(ダニエル・ロング)

である。なお、編集は『第一弾』でイテリメン語の章を執筆した小野智香子(監修はひきつづき中川裕)である。

一般的にも「アイヌ語」「コリヤーク語」「モンゴル語」「満洲語」「チベット語」なら聞いたことがあるはず。だが、「樺太アイヌ語」「アリュートル語」「オイラトモンゴル語」「シベ語」「ゾンカ語」となるとどうだろう。それらの方言関係(あるいは系統関係)を答えられた方々も、その全てについて、実際にどの程度異なるか(あるいは同じか)は知らないのではないか。さらに、「リス語」「ブヌン語」「小笠原語」となると、「存在は知っているが、実際にどのようなものなのかまでは…」ということになるはず。少なくともお恥ずかしながら私はそうだった。そういう意味では本書は「語学マニア」に向けた「第二の挑戦」である。では中身をさっそく見てみよう。

まず日本語の北方の言語が2つ。特筆すべきはまず最初に収録されている「樺太アイヌ語」であろう。入門用語学教材とはいえ、村崎恭子『樺太アイヌ語—文法篇—』(1979)以来、実

に 33 年ぶりの文法記述である。一般向け語学教材としては日本初であり、その点も重要である。このシリーズは語学教材出版の老舗から出ているだけあって、読者層や使い方を明確に設定してある。そのため実用性は抜群で、本家「エクスプレス」シリーズの中川裕・中本ムツ子『エクスプレス アイヌ語』(1997) は全国のアイヌ語学習者にとっても基本教材として親しまれている。アイヌ語の諸方言のなかでも独自色の濃い樺太方言が実用性の高い入門教材になったということは画期的なことである。だが、アイヌ語教材の困難はそういった教材としての完成度の問題ばかりではない。従来、アイヌ語教材は、アイヌ語を幼少時から第一言語として習得した高齢者の協力を得て作成されることが多かった。特に付録CDをつける、となればやはり「ネイティブの音声聞きたい」というのが読者の希望であろう。だが、現在では「アイヌ語を第一言語として習得した高齢者」はあまりに数が少ない。この教材ではアイヌ語研究者と、生まれた時からアイヌ語に親しんでいる新たな「アイヌ語の子どもたち」のひとりが音声吹き込みをおこなっている。文法記述自体は簡潔で動詞複合体の構造(複統合性)についてほとんどふれられていないのは残念だが、この分量では妥当なところであろう。

北の言語としてコリヤーク語と同系統の「アリュートル語」が入っているのは、語学マニアでなおかつ第一弾『日本語の隣人たち』を購入した方々にはサービスでもある。コリヤーク諸語は第一弾に収録されたイテリメン語との系統関係の有無が問題となっている言語なのである。音声・文法とも日本語話者にとってはかなり手ごわい言語かもしれない。一般の読者には少しばかり難しい用語が使われてもいるが、わずか3節の中で「抱合」までふれることができるコンパクトな記述となっている。執筆者はアリュートル語を専門とする言語学者だが、現地の社会・文化にも造詣が深い。例文を見るだけでカムチャツカの風景が目には浮かぶであろう。音声吹き込みは現地の民族音楽グループを率いるリディア・チェチュリナ。カムチャツカでは伝統音楽CDも発売されている。

第一弾との大きな違いが、いわゆる「東アジアの言語」(あるいはそのきわめて近い隣人たち)を収録したことである。満洲語、モンゴル諸語、チベット諸語はユーラシアの巨大な文字文化を背景に持つ言語である。それぞれと深い関係を持つ、本書収録の3言語の文字体系も大変興味深いものではあるが、語学の入門編で扱うには困難さがある。煩雑さを避けるために、本書では思い切ってローマ字(あるいはIPA)準拠の表記を採用している。文字マニアの方々は肩すかしをくらった気分かもしれないが、そのことがむしろ問題の複雑さを(言外に)表している。

オイラトモンゴル語の章には「モンゴル語」と「オイラトモンゴル語」両者の「たて文字」の写真が並べられている。入門者にそんな写真を見せても違いが分かるわけでもない。だが、一目で「似ている」こと(あるいはほとんど同じこと)は分かる。むしろそれで充分であろう。「モンゴル語」の教科書は通常、早い段階でキリル文字あるいは「たて文字」の習得をするように作られている。それはしばしば入門者には困難である。だが、本書では音聞きながらローマ字(IPA)準拠の表記、カナの「ふりがな」を見ていればよい。他方言(「標準モンゴル語」との比較も随所にあり、「モンゴル語」の既修者には比較しながらの学習も可能である。執筆・音声吹き込みともバイリタほかオイラトモンゴル出身者である。収録された例文は一見ただの入門編会話風だが、「あれは誰の馬ですか」の次の質問が「あなたの馬は何歳ですか」であるところなど、馬文化がしっかりと反映されている。

シベ語の章をみてみよう。清帝国で最も重要な公用語は満洲語であった。シベ語は満洲語と完全に同じ言語ではない。だが「シベ族(ママ)も書きことばとして満洲語を使用していま

す（実際には満洲文字に若干の改変を加えてシベ文字と呼ばれます）。との記述には戸惑うと同時に興味をそそられる。それは両言語の近さを思わせるが、ではどの程度近いのか。他の言語と同じく分量としてはわずか3節だが、専門家が力を注いだ記述である。満洲語を学ばれた方でシベ語に興味をお持ちの向きには、すぐに目を通すことをお勧めする。

ゾンカ語を含むチベット諸語も差異が大きい。特に古風な特長を残す文字表記と現在の発音の乖離はつとに有名である。やはりチベット語既修者には興味深い言語であろう。「ブータン」は日本でも親しみをこめて語られることの多い国である。だが、多民族国家であることを考慮したとしても、多数派の母語であるはずのゾンカ語が英語におかれていること、危機感をもった政府がゾンカ語の再普及に乗り出していることなどは言語政策の困難さを改めて感じさせる。そういった問題にもふれているのが本書の魅力である。

当然ながら、文字文化圏では文字が先行しがちである。その中であってなお、文字から離れた口頭言語としての独自性を有する3言語にふれられる、贅沢な機会である。

リス語、ブヌン語も本シリーズらしいチョイスである。リス語は中国・ミャンマー・タイ・インドにまたがって100万人の話者を持つ「大言語」である。文字文化と重なってきたシベ語やオイラトモンゴル語、ゾンカ語の話者より多いのだ。しかもリス人の大半がリス語を母語として話しているという。いったいどんな言語かとページをめくると、真っ先に6声調の説明。mó(55)「石臼をひく」、mǎ(24)「こする」、mq(33)「高い」、mo(33)「見る、見える」、mò(21)「年老いた」、mò(21)「草」。居酒屋で披露するにはちょっと「語学マニア度」が高すぎるかもしれないが、これは中国語（北京官話）の四声より雑学・蘊蓄としてつかえそうである。わずか3節の中で、単音節傾向、孤立語傾向が存分に味わえる。形態的に複雑な、あるいは多音節傾向が大きい言語を学んでいる人には新しい世界であろう。

ブヌン語は第一弾に収録されたセデック語に続いて台湾からのエントリーである。台湾先住民（中国語では「台湾原住民」と呼ぶ）の諸言語はいずれもオーストロネシア系諸言語であるが、現在復権運動がめざましい。なかでもブヌン語は話者が多く、活発な動きを見せている。オーストロネシア諸語は日本ではけっこうなじみのある言語であり、大都市であればインドネシア語、タガログ語などを耳にする機会は決して少なくない。それだけに、ブヌン語と他のオーストロネシア系言語の違いに興味をもたれる方も多いであろう。本書のブヌン語の章は限られた紙数で比較的詳しく文法を説明している。コラムも「ブヌン語は能格言語か」という一般向けとしては多少「マニアック」な話題となっている。

最後に収録されているのは「小笠原語」である。この言語名を聞いて何を思い浮かべるだろうか。「混合言語」だと説明されて、今度はどのような言語を思い浮かべるだろうか。アレウト語語幹にロシア語語尾のついたメドヌイ島アレウト語のようなものか。漢語彙を大量に含んだ日本語のようなものか。執筆者による「小笠原語」の章は混合言語になじみのない読者には衝撃的であろう。「なぜこれが一つの言語といえるのか？」という理論的説明がもう少しあってもよかったのではないかと感じるが、一般向けの書籍としてそれはむしろ野暮かもしれない。

以上さっとみてきたように、このシリーズは言語学的な視点と興味にもとづいて構成されてもいる。こういった内容の書籍が「一般向け語学書」として刊行されているというのは驚くべきことである。最近では「語学」があまりにも「実用」を志向しすぎているきらいがある。文法解説をとことんまで廃し、例文だけを大きな文字で印刷したお手軽な体裁のものが書店に並ぶ。だが、語学書を手にとる人ははたして「旅行用のサバイバル会話」を必要とする人たちは

かりだろうか。もちろん、言語と文化のあいだに所与の対応関係などない。だが、どの言語も文化や歴史と切り離しえないことも事実である。言語はそれらを「背負っている」のである。

「教材」の作成において重要なのは「誰を対象にするか」「何をゴールにするか」である。本書は内容から見て「非専門家の語学愛好者」を対象としている。言語そのものに興味をもっている人が、英語やフランス語とは違った言語の世界をのぞいてみる、そこまでがゴールであろう。これは大学生、大学院生とも重なる。言語学を専攻する大学院生にとっては物足りないかもしれない。だが、教養課程の学生、言語学を専門としない大学院生にとっては「世界にどのような言語があるのか」を知るためのいい教材となりうる。「ちょっとのぞいてみる」程度の語学教材としては価格が若干高価かもしれない。だが、8言語の入門書を買そろえても、いずれも最初の3課しか終えていない、という人は案外多いのではないか（私も含めて）。そう考えればコストパフォーマンスも決して悪くはない。

マイナーな言語の情報自体はインターネットでも得られる。だが、教材としてまとまっているものはあまり多く提供されていない。まして音源付のものは少ない。言語学者の論文は一般向け語学教材の代わりにはならない。本書の価値はたんに「珍しい言語の教材」ということにあるのではない。重要なのは「珍しい言語に語学教材の老舗書店のノウハウが活かされた教材」という点である。

最後にふれておきたい。樺太アイヌ語だけでなく、ここに収録された言語のうちいくつかは話者が急減している「危機言語」である。「日本語の隣人たち」つまり日本語の周辺地域に古くからあった言語の多くが現在急速に話者を失いつつある。書店の売り場にならべられた本書は、人々の目をそれら「危機言語」に向けさせてくれてもいる。こういった良企画には拍手を送りたい。

(たんぎく・いつじ／北海道大学アイヌ・先住民研究センター)